The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	田中清助名誉教授を悼む
Author(s)	
Citation	年報人間科学. 1995, 16, p. 237-239
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/7181
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

◇田中清助名誉教授を悼む◇

弔辞

大阪大学人間科学部教授　集団論・組織論講座　山口　節郎

二月二日、私達は敬愛する田中清助先生を失うという悲しみに遭遇することになりました。長年にわたるご闘病の報に接しながらも、やがては再び元気なお姿をみせていただけるものと恢復を念じていた私達の期待は空しいものとなってしまいました。あの高邁な威厳に満ちた、それでいて人に接するに温容を崩さないお人柄に魅せられた者は少なくはありません。学問の師としてのみならず、誠実に生きることの鑑としても私達を教え、導いて下さった先生に拝眉する機会が永久に失われたことは、痛恨の極みというより他にありません。

先生は昭和二十三年、東京大学文学部を卒業された後、名古屋大学文学部、大阪大学人間科学部、中京大学社会学部等で三十有余年にわたり教鞭をとってこられました。この間、先生は学問的には常に厳しさに徹し、妥協を許さず、アカデミズムの何たるかを身をもって垂範されました。本学での最終講義『私の知的活動の軌跡』のなかで先生はこう言っておられます。「二十才台から四十才台にはいるまで、私の研究活動は多産だったと云えるかもしれない。しかし論文の数こそ殖えても、それらの大部分はうたかたの如くに消えていった。だが私は消え去ったものを惜しむ気は全くなかったのである。私としては、大社会学者の著作には遠く及ばずとも、せめて数年は問題にされるような、あるいは何年か後になって価値が見直されるような論文を、自分自身の言葉で書きたいと念願し、マルクスは別として、社会学者の誰かの後について行こうとは考えていなかった、そうでなければ研究者とは云えない、と考えていた。」

研究者としての先生のご活躍は、戦後の日本を代表するマルクス主義社会学者の一人として多岐にわたっており、研究者としての第一歩を踏み出された頃のフロイト精神分析学批判をはじめ、大衆社

会論、集団論、組織論、労働社会学、社会体制論、現代社会論、好んでとり上げられたヘーゲルやサン・シモンに代表される独・仏の哲学や社会思想にまで及んでおり、博覧強記の人文的素養に裏打ちされたそのご研究は、まさにマルクス主義者のそれにふさわしく、社会をその全体性において捉えようとするものでした。とりわけ先生が十九才の頃に多元的国家論を通じて出会ったとされる「アソシエーション」の概念は、一時的にとぎれることはあっても、いろいろなサブ・プロブレムを生み出しつつ、やがては先生のマルクス主義的社会学における集団論の核心を形づくるなど、先生の学問的生涯を貫くものとなったのでした。

大阪大学に赴任された頃から、先生は古代の神話や伝説に強い関心をもってとり組まれはじめました。はるか後の世にまで伝わった神話や伝説は、それらの内容は荒唐無稽であるにせよ、人間の思惟の基本的形式を示していると考えられたからです。マルクスも依拠していたこの「思惟の基本形式」を詳らかにして「我が物」にし、そうすることによって先生の社会学の新しい展開を計られたのでした。もしこの試みが完成されるなら、それは先生が長年書きたいと念願しておられた著書に結実していたでしょう。その本の題名は『わたしのマルクス』となるはずでした。しかし残念ながら、この試みは完成されることなく、先生は旅立たれてしまいました。

先生は類い稀な語学の才能の持ち主でもあられ、早くからソヴェト社会学の紹介と研究に努め、この分野でのわが国の第一人者と目されておりました。一九六七年から六八年にかけて単訳で刊行されたオシーポフ編『ソヴェト社会学』全三巻も、そうしたお仕事の一つでした。その功績によって一九七七年にはソ連科学アカデミーから招きを受け、日ソ両国間での社会学界の相互交流と理解にも大きな足跡を残されたのでした。

私が大阪大学へ赴任してから間もない頃、亡くなられた甲田先生は夜の酒席でしばしば私にこう忠告されました。「山口よ、お前は一度田中さんと喧嘩をしなければいけない」と。上司と渡り合えるようになってはじめて人は一人前になれるという、甲田先生ならではの人生訓だったのでしょうが、私には恐ろしくて、とても田中先生に戦いを挑むなどということはできませんでした。それというのも、あるとき先生はこういうことをおっしゃられたことがあるからです。「(ご自分の)この仕事についての批判に対しては、私は多少の牙をもっている」と。確固不動の自信に裏打ちされてのこういう言葉を聞かされて、敢えて戦いなど挑めるものではありません。

田中先生の学問に対する厳しさを物語るエピソードには事欠きません。修士論文の口述試験で冷や汗をかいた想い出をもつ元院生も少なからずあるでしょう。かつてのある助手なども、講座で買い入れる図書について、「講座資料室に入ってきた人に見られても恥ずかしくない本の選び方をするように」と言われて、本を買えなくなってしまったことがあるほどです。

このように申し上げると、田中先生はただただ学問一筋のお人であられたかのような印象をもたれるかもしれません。しかし先生は一方ではまたこよなくお酒を愛される方でもありました。斗酒なお

辞さず、というほどであったかどうかはともかく、酒量においても人後に落ちず、しかも物静かで上品なお酒を楽しまれる方でした。お酒にまつわるエピソードがその人の人徳を偲ばせるものが多いというのも、田中先生ならではのことでしょう。

たとえば、ある夜、京都で飲まれていて終電車に乗り遅れ、枚方の自宅へお帰りになるのにタクシーを拾われたところ、途中で懐具合が心細いことに気付かれ、ギリギリまでタクシーを走らせて「そこまで！」と言って止められたそうです。運転手が尋ねるので止めた理由を話したところ、自宅まで送ってくれたとか。

胃潰瘍で手術をされ、医者からお酒を禁じられていたにも拘らず、奥様に内緒でいつも上着のポケットにおチョコを忍ばせ、「イヤぁ、これに一杯ぐらいならいいんですよ」とおっしゃりながら、一杯が二杯、二杯が三杯ということになるのでした。

ある年の暮、酔ってボーナスの入った鞄を電車に置き忘れ、鞄は戻ったもののボーナスは消えていました。普通であれば家庭争議にもなりかねないところ、先生は泰然自若。例年の通りまた大量の本を注文されたのでした。

書籍は文字通り、先生の分身とも言うべきものでした。奥様のお話しでは、ある洋書店に勤める人が東京へ転勤になるとき、これほどたくさんの本を先生が買われることを許しておられる奥様とはどのような方なのか、とお菓子をもって挨拶に来られたとか。病気で神経を侵されてほとんど本を読むことができなくなったときにも、送られてくるカタログに印をつけ、本を注文されることは絶えなかったとの由。昨日も、段ボール一箱分の洋書が届いたそうです。

とまれ、その謦咳に接し得た者からこよなく尊敬され、愛された田中先生は不帰の客となられました。私達の心の中にできた空洞は癒しようがありません。あの古武士然とした風格と同居するどこか飄々としたお姿を偲びながら、いまはただ先生のご冥福を祈るばかりです。

一九九五年二月五日